

はじめに

アジアの野良や市井には、こわしてはならない風景と、きたりがある。その風景は人々を誘い、また、その礎が人々のいのちを養い続けてきた。この風景こそが里山里海である。里山里海は、田と土と山、川、湖、海からなる。そこは食糧（食料）をはじめ、燃料、建材……生活に要する産物の源である。同時に人々の暮らしの場であり動植物の住処である。この暮らしの場は、資源を繰り返し循環、再生させなければ長続きしない。ましてや、人々が次代を紡ぐこともできない。それでは、アジアの民は、世代を重ねるために、どのような仕組みを築き上げてきたのであろうか。

それは太陽のエネルギーと水などをもとに、身のまわりの有機物を循環させ、食糧はじめ暮らしの必需品をすべて再生産し続けるものであった。それだけではない。地震や台風による自然災害、猛獣などの脅威、厳しい気候、病に立ち向かわなければならぬ。食糧（食料）を作るために、また、米を主食とする限り、湿地や斜面に田を築き、水を引き溜める必要があった。しかも作物を害する鳥獣や昆虫らとのあいだに折りあいをつけてきた。これは自らの蛋白質源として捕獲する必要があったからである。さらに攻め入る敵から家族を守ることが求められた。これらすべてが生活存立の必要条件であった。しかし、これらすべてを個だけで達成することは難しかった。このため皆はちからをあわせ、ことを成し遂げるために知恵と作法を会得していった。

然るに人々は、それぞれの家族がともに助けあい、共同する仕組みを作り上げた。過去の経緯により家族同士の関係性は地縁や血縁などさまざまである。家族が軒を連ねて集まり、一つ一つの「集落（ムラ）」を形づくっていった。すべての家族、そして集落すべての構成員がすべて仲間である。一人欠けても暮らしの営みの支障が出た。生まれるときから逝くときまで、皆が皆を支えるところが培われていく。個が私欲を優先し、資源を枯渇させると皆の暮らしは存続し得ない。諍いや揉め事を乗り越え続けると、そこにはともに欲を抑える「掟」が作られ、「共同」と「相互扶助」のところが醸成されていった。自然の猛威や厳しい条件には自然のちからに学び、背かず順応する暮らし方を編み出し、これを次代に伝えてきた。宗教や民族、呼称や体系などが違えども、米を主食にする人々のあいだには、共通する暮らしのしきたりが築き上げられてきた。

このしきたりは、高度経済成長前の日本にも全国津々浦々にあった。このようなしきたりによって支えられた暮らしには、今、日本で常態化するストーカーや虐待、孤立死など、暮らしの矛盾とは無縁であった。また、収入がないというだけで飢え死にするようなこともなかった。ムラや集落には、このような人々を支えていく気概とつながりがあった。だからこそ高齢者や障がい者をはじめ、誰もが生きていくことができた。

東南アジアの里山里海には、今も飾らない家族と集落の物語が生きている。集落には、持続可能を基とする暮らしの「しきたり」がある。それは、風土にあわせる生活の「知恵」であり、生活必需品を自給する「技」であり、皆の暮らしを支え次代を育む「仕組み」である。そして、五感に学んだ「掟」と「作法」がこれらを支えている。

そこでは、ゆったりとしたときの流れのなかで自然に順応し、背伸びをしない、他を落とし込める競

争を排除し、お金だけではない暮らしがある。経済社会の魔力に負けない限り、集落で生まれ、代を重ねるのが普通である。集落の子として子どもらをともに育て鍛え上げるころが備わっている。百姓や漁師のしわだらけの手足と意思。地域のローカルな風土。先達たちは、集落に育つ子どもを叱咤激励し、暮らし方を教えることをためらわない。つい五〇〜六〇年前までの日本でもそうであった。決して古くさくはない。そこでは、都会で貧困に陥った人々も大災害で生活が破綻した人々も、暮らしを蘇らせることもできる。多くの孤児を養育し生きるための知恵とところを授けることもできる。

一方、近年の東南アジアにおける急速な「経済発展」は、日本など「先進国」による経済進出による影響が大きい。「先進国」には、熱帯アジアが天然資源や食料基地であり、つぎの消費国に映る。広大な里山を切り崩して進むアブラヤシやパラゴムノキの大規模農場、里海の埋立地に広がるエビの養殖場、外資企業の工場……。これらが百姓らを労働者として里山里海から吸い取っていく。

日本も里山里海から都会に人々を集め、昭和から平成の経済発展を成し遂げた。一方、残った集落には過疎と崩壊の嵐が待ち受けていた。経済社会は、今もこれと同じ方法でアジアの奥地にまで企業の生産、販売網を拡大する。そして *Made by Japan* が集落や家族の暮らしと自然環境を蝕む。里山里海を追われ都会に向かう元百姓、経済社会に引き寄せられる若者たち。しかし、すべてが経済的に「成功」することはない。競争と格差社会が生活困窮者を激増させ孤児を作りだす。街角には生きるために乞食する親子、奴隷のごとく売られていく少年少女、売春宿に売られていく少女らがあとを絶たない。しかし、アジアの里山里海は、彼らの暮らしを再生するちからを持っている。

日本は、食の安全安心も、保育も介護もあの世に逝くときも、すべてお金で買い取る社会を作り上げた。この経済一辺倒の社会では、多くの人々が暮らしとところを疲弊させていかざるを得ない。わが国

では、現代的な視点から暮らしの一つ一つを見直し、今や礎を組み直す時に来ている。次代を育み、生まれる前から逝ったあとまでもに支えあう、こころ豊かな暮らしを再構築するため、本書は、インドネシア、フィリピン、タイ、ベトナムなどの里山里海に取材し、里人たちが共有する生きていくためのこころ、暮らしのしきたりとちからに迫る。

末筆ながら、発刊にご協力いただきました多くの関係機関、貴重な写真を提供くださった所蔵者の皆様、取材や聞き書き調査に快諾いただきましたすべての皆様に心から感謝の意を表します。

平成二八年一二月

著者しるす

おわりに

東南アジアの農漁村には、日本でも昭和三〇年代まで続いてきた暮らしのしきたりが息づいている。さらにそこには、今なお徹底循環型の生活が継承されている。

この暮らし方は、永きにわたり培われてきた知恵の結晶であり、食糧（食料）や燃料、水、空気をはじめ、暮らしに要する品々を繰り返し再生産する技として具現化された。しかも、多くの人々が自分の手足で家も道も水路も溜池等々も作ることができる。おおかたの人たちは、農機や化学農薬、化成肥料の力を借りることなく食糧（食料）を作ることができる。東南アジアの農漁村に生きる人々には、今も暮らしの必需品を作る技と作法が備わっている。

野山ではイノシシやネズミやモグラ、カエル、トカゲなどの蛋白質源、それに山菜や葉草など暮らしに必要な品々を採（捕）り、旬を頂く技を身につけている。今の日本のようにイノシシやシカなどの野生動物が里にまでびこり作物に被害を与えることも少ない。それは里山に半飼育する獲物であるからである。そもそも獣らに食べられた作物は、被害を受けたのではなく、捕獲することによって蛋白質源に循環させ、集落の人々の血肉になってきた。里海や里川でも同じように魚介を捕ることができ、燃料も水も建材も、すべて自らの手足で確保することができる。そこには奥山から里山里海への物質循環をもとに、すべて無駄なくつながった人を含む動植物の生き様が現存している。

百姓らは何よりも採集を加減し、資源を枯渇こかつさせず保続させる気概を養ってきた。集落に暮らす人々は、採（捕）り過ぎることさえなければ、身のまわりに育てる食材や木材、燃料、里海や里川から採取する魚介、里山に捕獲（採取）する動植物など、自然の恵みによって永きにわたり暮らしを全うできる。つぎなる核心は、村や集落での共同と相互扶助、家族内や親戚どうしの協力のちからである。一人で行うのが困難な作業については、互いに共同で行う作法を心得ている。米を主食とする仲間は、稲作などに大勢の力を必要とする。必然的に多くが大家族で暮らしを営んだ。家族内はもちろんのこと、複数の家族が集まった集落を母体に、家族どうしの相互扶助によって世代を重ねてきた。これらすべての営みが次代を育み、人々の絆を養い続けてきた。さらに、地主も小作も日雇い農民も、互いに不可欠な存在である。だからこそ皆が互いに支えあう。また、小農それぞれが小さな生業を分かちあい、互いに暮らしを下支えする。

水田やバナナ畑の小作、大工などの手伝い、ヤシ酒や酢の原液採取、掃除、草刈り、水田の鳥追い、魷えびや刺し網、タモ網などで捕える魚、干潟での採貝等々から収入を得ることができる。また、家畜の仲買や市場での売り子、これでも小さなお金が回る。これらの小さなお金と屋敷の自給畑からの品々、お裾分けや共同飲食などによって皆が食っていくことができる。この暮らし方は、生まれる前から逝ったあとまで皆がともに支えあう相互扶助の仕組みを築き上げた。これは皆のところに刻まれた暮らしの流儀といえる。

集落や家族、皆々の共同と相互扶助のちからは、日々を生き、世代を重ね、文化と伝統を育んでいくための礎である。集落の仲間と暮らして子育てを補いあい、老いゆく親らを逝くときまで支え続ける。これは集落、そして家族を守り、世代を重ねるためのおおもとである。この根元ねもとから湧き出す民たみのちか

ら、こそが集落の皆々を守ってきた。そしてこのちからが経済社会に翻弄ほんろうされない、当たり前前の暮らし方を何代にもわたり伝えてきた。しかも過去から次代へと、これら一連の技と知恵、作法を不足なく授け続けてきた。里山里海は、飯を作り、家族を養い、次代と集落を支えるゆりかごである。本書の画像に映し出された人々のところと日常を大切にしたい。

その里山里海には、人々の暮らしとの相互関係によって、多種多様な動植物が暮らし、生活環境が生み出されてきた。これが生物多様性の源である。わが国では、かつて世代を重ねていた日本産のトキやコウノトリなどの生きものが野生絶滅した。日々、多くの生きものが数を減らしている。これらが野生で広く暮らせる環境は、人々が家族を養い、安全で心豊かな暮らしを継承できるところである。そこでは、人間が人間らしく生きていくことができる。

日本など先進国と呼ばれる国々では、リストラや長時間労働、労働災害をはじめ、ハラスメントなどの経済社会の軋轢あつれきによって、暮らしを破壊されていく人々は膨大な数である。行く手には精神的被害を受け、また、自殺を選ぶ人が絶えない。二〇一三年、日本の自殺者総数は年二万七二八三人に達した（内閣府）。多くは経済社会の犠牲者である。

多くの自殺者を出し、児童虐待や居所不明の児童や生徒が続出する。また、核家族化が進む日本では、連れあいに先立たれると残る者が逝くときは一人である。お金がなければ介護も葬儀も享受きやうじゆできない。一生を社会のため、子どものために捧げた最期があまりにも侘しい先進国である。さらに農地を耕作放棄地にしながら食料自給率はおよそ四〇%、山々に多くの人工林を育てながら木材自給率は二八%に過ぎない。日本の国、そして人々の暮らしは持続可能なのか。

昭和三〇年代以降、日本が欧米とともに築いてきた化石燃料への転換、大量生産と大量消費による経

済モデルは、永遠の姿ではないことを誰もが知っている。なつかしい風景には未来を生きる知恵が隠されている。先人の知恵とところに学び、お金の魔力に屈せず、日々をゆっくり心豊かに暮らすこと、持続可能な暮らし方を復活させること、家族、そして近隣に相互扶助の絆を再生し、難なく次代を育み、生まれるときから逝くときまで支えあう集落を蘇よみがえらせること、この暮らし方と経済の仕組みとが一步步緩やかに共存する社会になっていくことを願ってやまない。心情の交流こそが人々の未来をつくりだす。新たに目指すべきは、生きていくためのゆるやかな**共同体**である。これからも東南アジア奥地の農村に学ぶことは数多い。